

このひと

日本分析化学会会長に就任される

二瓶 好正 氏

(Yoshimasa NIHEI
東京理科大学理工学部教授)



1940年7月 東京都に生まれる。1963年東京大学工学部工業化学科を卒業。1968年同大学院工学系研究科博士課程を単位取得退学。同年4月東京大学工学部助手。1974年同講師。1976年東京大学生産技術研究所助教授。1977～1978年米国カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所客員研究員。1987年東京大学生産技術研究所教授。1998～2001年東京大学環境安全研究センター長。2001年東京理科大学理工学部教授。1969年「真空紫外スペクトルの測定とその強度に関する研究」により工学博士。1975年日本分析化学会奨励賞，1988年日本化学会学術賞，1996年日本分析化学会学会賞。日本表面科学会会長，環境科学会会長，日本分析化学会副会長などを歴任。

筆者が二瓶好正先生のご指導を受け始めたのは今から25年ほど前であり，現在に至るまで先生の様々な面を存じ上げているつもりであったが，いざご紹介の記事を書く段になると，さて何をどうご紹介するのが的を得ているのか大いに迷う次第である。先生のご趣味に関しては，6年余り前の本誌に東京大学生産技術研究所の渡辺正先生による優れた記事（ぶんせき，1996（9），732）があり，そちらを参照していただくのが適当であろう。その後6年が経つ間の変化といえば，ご趣味にますます磨きがかかったことであろうか。

先生の比較的近くにいるはずでひとも見習いたくもなかなか真似のできない点として，その学術的交流範囲の広さが挙げられる。研究室の柱となる研究分野は固体表面のキャラクタリゼーション，特にX線光電子回折法に関するご研究であり，この分野は分析化学はもちろんのこと固体表面における化学，物理と密接に関係している。さらに学術的には固体の電子物性，真空工学など，実際の装置の立ち上げにおいては分析機器設計，装置の自動制御など，応用の面においてはおよそあらゆる種類の固体材料表面にかかわりを持っている。これら様々な分野について，単に「その分野から知識を借りる」あるいは「その分野の役に立つ」といった関係ではなく，それぞれの分野に自ら積極的に入り込んでいき，各分野の専門家と対等に話をするまでになってしまうという恐るべき能力を持っているのである。先生がかつて委員長を務められ，現在でも重責を担っている日本学術振興会マイクロビームアナリシス第141委員会を構成する委員は，分析化学はむしろ少数派で，物理学，電子工学から医学に至るまで幅広い専門家に囲まれ，その中で研究委員会を力強くリードされている。文部省科学研究費補助金

「環境科学」特別研究（1977～1986年），およびそれに続く重点領域研究「人間 環境系の変化と制御」（1987～1993年）は，先生の研究・活動領域を環境研究へと大きく広げた。これらの大型研究プロジェクトでは先生は大組織の代表こそお務めにならなかったが，終始事務局を率いる立場におられ，およそ環境と関係するあらゆる分野の研究者との交流を広げられた。その中には法律学や都市設計学など，普段分析化学とはあまり縁のない研究者も多数含まれており，先生の学術交流は自然科学の領域にすらもはやとどまっていない。

このような広さを持つに至った背景には，もちろん先生の優れた思考力や学識の深さがあるわけだが，それにもまして重要な点として，とにかく先生が「まじめ」であることが挙げられる。それは何事にも誠実に取り組み，新しい物事を積極的に吸収するというだけでなく，議論の進め方その他あらゆることから「いい加減さ」を排除し，筋を通すことを重視する生き方の姿勢のようなものを感じさせる。読者諸兄に誤解を招かないよう付け加えるが，二瓶先生は決して「堅物」ではない。むしろその逆で，筋を通して進めるべきことはそれが必ずしも容易な状況でなくても臨機応変，柔軟な発想で全力で取り組むことをいとわない。筆者が時々二瓶先生から耳にした言葉の中に「正面突破」という表現がある。苦境を打開するためには可能なあらゆる方策を練り，実行する一方で，最終的には正面に道を開いていくべく代表者交渉に臨むというやり方を大学内外で何度も見せていただいた。近くにいるものとして，先生のこの姿はきわめて力強く頼り甲斐を感じさせるものであり，多くの人もそれを感じ取っていたと想像される。日本分析化学会は必ずしも常に順風満帆とはいかないかもしれないが，二瓶先生の舵取りには大いに期待できるものと思われる。

〔東京大学環境安全研究センター 尾張真則〕